

はこれらの方法によつて特別会計に納付された金額を按配して、大体 20 年以内に於て『資金運用部特別会計』からこの特別会計に対して支出された貸付金即ち当面の問題としては 15 億円の償還及び利子の支払を行うという仕組みである。この措置により整備しようとする箇所についてはまだ色々議論があるが、目下の計画として採り上げられているものは、直轄施工箇所としては関門トンネル、戸塚国道等であり、地方公共団体の事業として貸付金の対象となるものには江北橋(東京)、上江橋(埼玉)、濃尾大橋(愛知、岐阜)、衣浦橋(愛知)、鳥飼大橋(大阪)、大川橋(福岡、佐賀)、住ノ江橋(佐賀)、伊ノ浦橋(長崎)、愛岐道路(愛知、岐阜) 其の他三浦半島、伊豆半島等に於ける観光的性格を持つ道路等がある。その完成は、一部のものを除いては 3年から5年を要するものであるから、この『資金運用部特別会計』からの融資も少くとも 5ケ年間は継続するものと考えて然るべきであろう。恐らく、予

定箇所の完成に伴つて新規の箇所が採り上げられることにより、当分の間この融資の方法による有料道路制度は継続するであろう。或いはこの運用部資金の融資に代えて公募公債による資金調達の方法が考えられることになるかもしれない。この方が寧ろ本則であるが現在はこの措置を採ることが許されないのである。ただ何れにしてもこの制度は例外的な制度であることを明記し、世論を顧みずに単に管理者側の都合によつて財政措置の補充程度に簡単に利用されてはならないものであることを明確にしておく必要がある。その運用宜しきを得るならば、本制度は我国の道路の整備に関して必ずや新生面を開くことになるであろう。なおこの制度を法制化するために目下建設省に於ては道路法の特別法として『道路整備特別措置法』を、大蔵省に於ては『特定道路整備事業特別会計法』を立案中であり、両者共に近く政府案として国会に提出される筈であることを附記しておく。

UDC 624.131.3.004

ブルドーザー、キャリオールの施工歩掛りについて

正員 伊丹康夫*

1. 使用機械

表-1 ブルドーザー一覽表

型式及製作会社名	規 格 及 び 性 能					
	自重 kg	最大牽引力 kg	牽引出力 HP	公称馬力	起 動 方 法	変速レバー
ALLIS, CHALMERS HD-7	5900	5521	60.10	71.08	ディーゼル機関 起動電動機	前進 4 段 後進 1 段
同 HD-10	9400	8620	86.63	101.62	"	6 段
同 HD-14	12600	12709	132.19	150.48	"	6 段
CATERPILLAR R-4	4500	3271	35.33	40.83	ガソリン機関	5 段
同 D-4	4600	3562	35.68	41.17	ディーゼル機関 補助ガソリン機関	1 段
同 D-6	7200	4390	45.40	52.60	"	5 段
同 D-7	10700	9684	80.44	92.85	"	5 段
同 D-8	15000	11888	113.14	131.00	"	6 段
INTERNATIONAL- HARVESTER TD-9	3100	4090	38.88	45.91	圧縮を交えてガソリン 起動 起動電動機	1 段
同 TD-14	7000	6090	54.04	64.02	"	6 段
同 TD-18	10000			54.10	"	2 段
東日本重工製 BB III 9 TON	10500	7500	65.00	75.00	起動電動機	4 段
小倉製鋼製 KTC-70	14000			75.00	ディーゼル機関	1 段
小松製作所 T-40	1640	3500	40.00	50.00	ガソリン機関	3 段
同 D-50	6000	5000	50.00	60.00	ディーゼル機関 圧縮を交えてガソリン 起動 起動電動機	1 段
東日本重工製 BF	15000	11200	76.00	95.00	ガソリン機関	6 段
小松製作所 D-80	15750	11200	80.00	95.00	ディーゼル機関 ガソリン機関	6 段
加藤製 民生製	1500				起動電動機	3 段
B-8				90.00	ディーゼル機関	1 段

註：自重欄記載の重量は総て土工板を装備しない重量である。

* 建設省関東地建、東京機械整備事務所長

表-2 キャリオール一覧表

型式及製作所名	容 積	型 式	重 量
LAPLANTCHOATE C-22	1 $\frac{3}{4}$ ~2yd ³	ゴムタイヤ型 前倒式	2550lb
同 C-24	1 $\frac{3}{4}$ ~2 "	クローラー型 前倒式	2800 "
同 C-44	4~5 "	" " 扉式	6500 "
同 L.P	8 "	ゴムタイヤ型 押し扉式	14000 "
同 L.P	12 "	同 上	20000 "

2. 土工量の算定公式

$$\text{土工量 (m}^3/\text{h)} = \frac{Q \times f \times 60 \times E}{C_m}$$

式中 Q: 土運箱又は土工板の容量 (掘り弛めた土量で表わした m³) (表-4, 5)

f: 土の増減率 (求める土の状態に応ずる係数を用い) (表-3)

60: 1.0h の分数

E: 機械の作業能率 (50~80%)

C_m: 機械の1循環作業の所要時間 (min) (表-6)

表-3 土量換算係数 (f)

土 質	土 の 現 状	換 算 す べ き 状 態		
		自然状態の土	掘り弛めた場合	締固めた場合
砂	自然状態の土	1.00	1.11	0.95
	掘り弛めた場合	0.90	1.00	0.86
	締固めた場合	1.05	1.17	1.00
普通土	自然状態の土	1.00	1.25	0.90
	掘り弛めた場合	0.80	1.00	0.72
	締固めた場合	1.11	1.39	1.00
粘 土	自然状態の土	1.00	1.43	0.90
	掘り弛めた場合	0.70	1.00	0.63
	締固めた場合	1.11	1.59	1.00

註: 本表は米国の資料より採って掲げたものであつて、現場の土質に応じてこの係数が変化しそのまま利用し難い場合もあるから注意を要する。

表-4 キャリオール土運箱の作業容量

土運箱容 量	土 質	掘り弛めた場合の容量			
		山 積	水 平	ドリ勾配 5%	ドリ勾配 10%
6.0m ³	軽い土	—	7.1m ³	7.8m ³	8.4m ³
	中位の土	最大 8.4m ³	8.0 "	8.4 "	8.4 "
	重い土	—	8.4 "	8.4 "	8.4 "
9.0m ³	軽い土	—	8.9 "	9.6 "	10.3 "
	中位の土	最大 11.5m ³	9.9 "	10.8 "	11.5 "
	重い土	—	11.5 "	11.5 "	11.5 "

註: 本表の各種容量はキャリオールに山積とした場合を示す。但し換算計算の基準には平坦地上を運搬する普通土の容量を採用する。

表-5 ブルドーザー土工板の作業容積

ブルドーザー型式	掘り弛めた場合	摘 要
D-8	2.4 m ³	平坦地上を運搬する普通土の容積である。
D-7	2.2 "	同 上
HD-10	2.2 "	"
HD-7	1.2 "	"
東日本BF	2.2 "	"
小松D-80	2.0 "	"
小倉KTC-70	2.0 "	"
東日本BB III	1.2 "	"

表-6 ブルドーザー1循環作業の所要時間 (C_m)

機種名称	D-8	D-7	HD-10	HD-7	東日本BF	小松D-80	小倉KTC-70	東日本BB-III
前進	43.0 m/min	38.0 m/min	45.0 m/min	49.0 m/min	34.0 m/min	36.0 m/min	34.0 m/min	32.0 m/min
ギヤ入換	0.333 min	0.333 min	0.333 min	0.333 min	0.333 min	0.333 min	0.333 min	0.333 min
後退	56.0 m/min	56.0 m/min	57.0 m/min	55.0 m/min	52.0 m/min	55.0 m/min	55.0 m/min	47.0 m/min

註: 前進は第1速度及び第2速度を、後退は第2速度の80%を採用した。

表-7 キャリオール1循環作業に対する所要の時間算出表 (C_m)

機種名称	キャリオール		摘 要
	D7-6.0m ³ 積	D8-9.0m ³ 積	
積 込	1.00 min	1.50 min	固定時間
捨 土	0.50 "	0.50 "	同
方向転換	0.50 "	0.50 "	同
ギヤ入換	0.50 "	0.50 "	同
前 進	59.0m/min	59.0m/min	可変/D7-第2速度 時間/D8-第2速度
後 進	123.0m/min	131.0m/min	同 (D7-第4速度 D8-第6速度)

3. 機械実作業日時の例

(1) 1.0日就業8.0h 中実績 (昭.25.4~昭.26.3 建設省関東地方建設局直轄施工) によれば

実作業 63%≒5.0h 整備 25%≒2.0h
休憩 12%≒1.0h

1.0日平均稼働時間 5.0h とする。

(2) 1箇月を30.0日間として実績 (昭.25.4~昭.26.3 建設省関東地方建設局直轄施工) によれば

実作業 67%≒20.0日
故障 3%≒1.0日
雨その他 10%≒3.0日
整備 7%≒2.0日
公休 13%≒4.0日

1箇月平均稼働日数 20.0日間とする。

4. 主燃料

表-8 実作業 1.0h 当り消費量 (単位: lit/h)

機種	ブルドーザー							
	東日本 BB 型	小倉 KTC-70	HD-7	HD-10	D7	D8	東日本 BF	小松 D-80
軽油	6.3	8.2	7.0	10.0	9.4	10.3	8.4	8.4

機種	キャリオール スクレーパー	摘要
型式	D7-6 m ³ D8-9 m ³	キャリオールの軽油消費量はブルドーザー
軽油	11.3 12.4	軽油消費量より約 20% 増大する。

註: 本表は(昭 25.4~昭 26.3 建設省関東地方建設局直轄 施工)実績を参考にしたものである。

5. その他の材料

表-9 ブルドーザー作業

機種	材料名称	耐久実作業時間	取替数量	摘要
ブルドーザー	ケーブル	300 h	約20mとする	普通土の場合
同	削土刃	1000 "	約1組とする	同

表-10 キャリオール作業

機種	材料名称	耐久実作業時間	取替数量	摘要
キャリオール スクレーパー	ケーブル	200 h	約30mとする	普通土の場合
同	削土刃	1000 "	約1組とする	同
同	タイヤ	4200 "	約4本とする	同

6. 労力

表-11 労力歩掛り基準

名称	属類別	機械1台1日 当り実人員	歩掛りの基準				機械1台1日当り 設計所要人員
			月	間	間実作 常	数	
操作手	常備者	1.0人	30日	20日	30/20=1.5	1.5人/台/日	
整備員	同	0.5"	30"	20"	30/20=1.5	0.75 "	
助手	日備者	0.5"	20"	20"	20/20=1.0	0.5 "	
人夫	同	0.5"	20"	20"	20/20=1.0	0.5 "	

7. 雑品

オイルフィルター及びフュエルフィルター等の雑品一式の費用は油脂その他材料費合計の 3% 程度で足りる。

8. 労力歩掛りの例

機械 1 台 1.0 日当り歩掛り基準

操作手: $1.0 \times \frac{30}{20} = 1.5$ 人 / 台 / 日 (常備者)

整備員: $0.5 \times \frac{30}{20} = 0.75$ 人 / 台 / 日 (同)

上式中 $\frac{30}{20}$ は 1 箇月中機械の稼働 20 日間であるため係数 1.5 を乗じ歩掛りの基準とする。

助手: 0.5 人 / 台 / 日 (日備者)

人夫: 0.5 人 / 台 / 日 (同)

9. 計算例

(1) ブルドーザー作業 100.0 m³ 当り歩掛りの計算例

使用ドーザー: D7 ブルドーザー

土工板容量 Q=2.2 m³

平均運土距離: 50.0 m (片道)

土質: 普通土

効 率: E=80%

土量換算係数: 掘り弛めた場合に対する自然状態の場合の比

$f=0.8$ (表-3 参照)

1 循環作業の 所要時間 = $\frac{50}{38} + \frac{50}{56} + 0.333 = 2.542$ min

$C_m = 2.542$ min

上記に対し 100.0 m³ 当り軽油消費量及び労力歩掛りを求める計算法。

a) 1.0 h 当り運搬土量

$$= \frac{Q \times f \times 60 \times E}{C_m} = \frac{2.2 \times 0.8 \times 60 \times 0.8}{2.542} = 33.23 \approx 33.2 \text{ m}^3/\text{h}$$

b) 1.0 日間当りの運搬土量

$= 33.2 \text{ m}^3 \times 5.0 \text{ h} = 166.0 \text{ m}^3/\text{日}$

c) 100.0 m³ 当りの作業日数

$166.0 \text{ m}^3 : 1 \text{ 日} = 100.0 \text{ m}^3 : x \text{ 日}$

$x = \frac{1 \times 100}{166} = 0.602 \text{ 日}/100.0 \text{ m}^3$

d) 100.0 m³ 当り軽油消費量

$9.4 \text{ lit} \times 5.0 \text{ h} \times 0.602 = 28.294$

$= 28.0 \text{ lit}/100.0 \text{ m}^3$

e) 100.0 m³ 当り揮発油の消費量

距離: 50 m の場合

運土量: 166.0 m³/日

$166.0 \text{ m}^3 : 1 \text{ lit} = 100 \text{ m}^3 : x \text{ lit}$

$x = \frac{1 \times 100}{166} = 0.60 \text{ lit}/100.0 \text{ m}^3$

f) ケーブル消費量

$(\frac{300 \text{ h}}{5 \text{ h}}) = 60$ 日間に對し 20 m くらいとする

距離: 50 m の場合

$(166 \text{ m}^3 \times 60 \text{ 日}) : 20 \text{ m} = 100 \text{ m}^3 : x \text{ m}$

$x = \frac{20 \times 100.0}{166 \times 60} = \frac{2000}{9960} = 0.20 \text{ m}/100.0 \text{ m}^3$

g) 削土刃消費量

$(\frac{1000 \text{ h}}{5 \text{ h}}) = 200$ 日間に對し 1 組くらいとする

距離: 50 m の場合

(166 m³×200 日): 1 組=100 m³: x 組

$$x = \frac{1 \times 100}{166 \times 200} = \frac{100}{33,200} = 0.003 \text{ 組}/100.0 \text{ m}^3$$

h) 100.0 m³ 当り労力歩掛り

距離: 50 m の場合

操作手

$$= 1.0 \text{ 人} \times \frac{30}{20} \times 0.602 = 0.903 \approx 0.9 \text{ 人}/100.0 \text{ m}^3$$

整備員

$$= 0.5 \text{ 人} \times \frac{30}{20} \times 0.602 = 0.451 \approx 0.5 \text{ 人}/100.0 \text{ m}^3$$

助手

$$= 0.5 \text{ 人} \times \frac{20}{20} \times 0.602 = 0.301 \approx 0.3 \text{ 人}/100.0 \text{ m}^3$$

人夫

$$= 0.5 \text{ 人} \times \frac{20}{20} \times 0.602 \times 0.301 \approx 0.3 \text{ 人}/100.0 \text{ m}^3$$

(2) キャリオール作業 100.0 m³ 当り歩掛りの計算例

使用機械: D7 トラクター牽引

6.0 m³ 積土運箱組合せ

平均運土距離: 100.0 m の場合 (片道)

土質及び勾配: 普通土であつて平地の場合

Q=6.0 m³ とする

効 率: E=80%

土量換算係数: 掘り弛めた場合に対する自然状態の場合

f=0.8 (表-3 参照)

1 循環作業の所要時間 (min)

$$= 1.0 + 0.5 + 0.5 + 0.5 + \frac{100}{59} + \frac{100}{123} = 5.008 \text{ min}$$

C_m=5.008 min

上記に対し 100.0 m³ 当り軽油消費量及び労力歩掛りを求める。

計算法

a) 1.0 h 当り運搬土量

$$= \frac{Q \times f \times 60 \times E}{C_m} \\ = \frac{8.0 \times 0.80 \times 60 \times 0.8}{5.008} \\ = 61.3 \text{ m}^3/\text{h}$$

b) 1.0 日間当り運搬土量

$$= 61.3 \text{ m}^3 \times 5 \text{ h} = 307.0 \text{ m}^3/\text{日}$$

c) 100.0 m³ 当りの作業日数

$$307.0 \text{ m}^3 : 1.0 \text{ 日} = 100.0 \text{ m}^3 : x \text{ 日}$$

$$x = \frac{1.0 \times 100.0}{307.0} = 0.326 \text{ 日}/100.0 \text{ m}^3$$

d) 100.0 m³ 当り軽油消費量

$$11.3 \text{ lit} \times 5.0 \text{ h} \times 0.326 = 18.419 \\ \approx 18.0 \text{ lit}/100.0 \text{ m}^3$$

e) 100.0 m³ 当り揮発油消費量

距離: 100 m の場合

運土量: 307.0 m³/日

307.0 m³: 1 lit=100 m³: x lit

$$x = \frac{1 \times 100.0}{307} = 0.33 \text{ lit}/100.0 \text{ m}^3$$

f) ケーブル消費量

$$\left(\frac{200 \text{ h}}{5 \text{ h}} \right) = 40 \text{ 日間に対し } 30 \text{ m くらいとする}$$

距離: 100 m の場合

(307 m³×40 日): 30 m=100 m: x m

$$x = \frac{30 \times 100}{307 \times 40} = \frac{3000}{12280} = 0.24 \text{ m}/100.0 \text{ m}^3$$

g) 削土刃消費量

$$\left(\frac{1000 \text{ h}}{5 \text{ h}} \right) = 200 \text{ 日に対し } 1 \text{ 組くらいとする}$$

距離: 100 m の場合

(307 m³×200 日): 1 組=100 m³: x 組

$$x = \frac{1 \times 100}{307 \times 200} = \frac{100}{61400} = 0.002 \text{ 組}/100.0 \text{ m}^3$$

h) タイヤ消費量

$$\left(\frac{4200 \text{ h}}{5 \text{ h}} \right) = 840 \text{ 日間に対し } 4 \text{ 本くらいとする}$$

100 m³ 当りタイヤ消費量

距離: 100 m の場合

(307 m³×840 日): 4 本=100 m³: x 本

$$x = \frac{4 \times 100}{307 \times 840} = \frac{400}{257880} = 0.002 \text{ 本}/100.0 \text{ m}^3$$

i) 100 m³ 当り労力歩掛り

距離: 100 m の場合

操作手

$$= 1.0 \text{ 人} \times \frac{30}{20} \times 0.326 = 0.489 \approx 0.5 \text{ 人}$$

整備員

$$= 0.5 \text{ 人} \times \frac{30}{20} \times 0.326 = 0.244 \approx 0.2 \text{ 人}$$

助手

$$= 0.5 \text{ 人} \times \frac{20}{20} \times 0.326 = 0.163 \approx 0.2 \text{ 人}$$

人夫

$$= 0.5 \text{ 人} \times \frac{20}{20} \times 0.326 = 0.163 \approx 0.2 \text{ 人}$$

10. 歩掛り表

表-12 ブルドーザー 100.0 m³ 当り運搬歩掛り表

機 種	運 土 、 距 離	実 作 業 一 、 日 の 土 量	月 平 均 一 、 日 の 土 量	100.0 m ³ 当り												
				材 料							勞 力					
				軽 油	モ ビ ー ル 油	ギ ョ ウ ヤ イ ル	グ リ ー ス	ボ ロ	揮 発 油	ケ ー プ ル	削 土 刃	雑 品	操 作 手	整 備 員	助 手	人 夫
D 8 ブ ル ド ー ザ ー	30	m ³ 294.0	m ³ 196.0	lit 18.0	lit 0.9	lit 0.09	kg 0.03	kg 0.03	lit 0.34	m 0.11	組 0.002	材 料 費 の 内 3% 以 上	人 0.5	人 0.3	人 0.2	人 0.2
	50	193.0	129.0	27.0	1.4	0.14	0.05	0.05	0.52	0.17	0.003	"	0.8	0.4	0.3	0.3
	80	127.0	85.0	41.0	2.1	0.21	0.07	0.07	0.79	0.26	0.004	"	1.2	0.6	0.4	0.4
	100	104.0	69.0	50.0	2.5	0.25	0.08	0.08	0.96	0.32	0.005	"	1.4	0.7	0.5	0.5
D 7 ブ ル ド ー ザ ー	30	255.0	170.0	18.0	0.9	0.09	0.03	0.03	0.39	0.13	0.002	材 料 費 の 内 3% 以 上	0.6	0.3	0.2	0.2
	50	166.0	111.0	28.0	1.4	0.14	0.05	0.05	0.60	0.20	0.003	"	0.9	0.5	0.3	0.3
	80	109.0	73.0	43.0	2.2	0.22	0.07	0.07	0.92	0.31	0.005	"	1.4	0.7	0.5	0.5
	100	89.0	59.0	53.0	2.7	0.27	0.09	0.09	1.12	0.37	0.006	"	1.7	0.8	0.6	0.6
H D 10 ブ ル ド ー ザ ー	30	277.0	185.0	18.0	0.9	0.09	0.03	0.03	—	0.12	0.002	材 料 費 の 内 3% 以 上	0.5	0.3	0.2	0.2
	50	182.0	121.0	27.0	1.4	0.14	0.05	0.05	—	0.18	0.003	"	0.8	0.4	0.3	0.3
	80	120.0	80.0	42.0	2.1	0.21	0.07	0.07	—	0.28	0.004	"	1.2	0.6	0.4	0.4
	100	98.0	65.0	51.0	2.6	0.26	0.09	0.09	—	0.34	0.005	"	1.5	0.8	0.5	0.5
H D 7 ブ ル ド ー ザ ー	30	155.0	103.0	23.0	1.2	0.12	0.04	0.04	—	0.22	0.003	材 料 費 の 内 3% 以 上	1.0	0.5	0.3	0.3
	50	102.0	68.0	34.0	1.7	0.17	0.06	0.06	—	0.33	0.005	"	1.5	0.7	0.5	0.5
	80	68.0	45.0	51.0	2.6	0.26	0.09	0.09	—	0.49	0.007	"	2.2	1.1	0.7	0.7
	100	55.0	37.0	64.0	3.2	0.32	0.11	0.11	—	0.61	0.009	"	2.7	1.4	0.9	0.9
小 倉 K T C 70 型	30	218.0	145.0	19.0	1.0	0.10	0.03	0.03	—	0.15	0.002	材 料 費 の 内 3% 以 上	0.7	0.3	0.2	0.2
	50	142.0	95.0	29.0	1.5	0.15	0.05	0.05	—	0.23	0.004	"	1.1	0.5	0.4	0.4
	80	93.0	62.0	44.0	2.2	0.22	0.07	0.07	—	0.36	0.005	"	1.6	0.8	0.5	0.5
	100	76.0	51.0	54.0	2.7	0.27	0.09	0.09	—	0.44	0.007	"	2.0	1.0	0.7	0.7
東 日 本 B B 3 型	30	121.0	81.0	26.0	1.3	0.13	0.04	0.04	—	0.28	0.004	材 料 費 の 内 3% 以 上	1.2	0.6	0.4	0.4
	50	78.0	52.0	40.0	2.0	0.20	0.07	0.07	—	0.43	0.006	"	1.9	1.0	0.6	0.6
	80	51.0	34.0	62.0	3.1	0.31	0.10	0.10	—	0.65	0.009	"	2.9	1.5	1.0	1.0
	100	41.0	27.0	77.0	3.9	0.39	0.13	0.13	—	0.81	0.012	"	3.7	1.8	1.2	1.2
東 日 本 B F 型	30	236.0	157.0	18.0	0.9	0.09	0.03	0.03	0.42	0.14	0.002	材 料 費 の 内 3% 以 上	0.6	0.3	0.2	0.2
	50	153.0	102.0	27.0	1.3	0.13	0.04	0.04	0.65	0.22	0.003	"	1.0	0.5	0.3	0.3
	80	100.0	67.0	42.0	2.1	0.21	0.07	0.07	1.00	0.33	0.005	"	1.5	0.8	0.5	0.5
	100	82.0	55.0	51.0	2.6	0.26	0.08	0.08	1.21	0.41	0.006	"	1.8	0.9	0.6	0.6
小 松 D 80 型	30	225.0	150.0	19.0	0.9	0.09	0.04	0.04	0.44	0.15	0.002	材 料 費 の 内 3% 以 上	0.7	0.3	0.2	0.2
	50	146.0	97.0	29.0	1.4	0.14	0.04	0.04	0.68	0.23	0.003	"	1.0	0.5	0.3	0.3
	80	96.0	64.0	44.0	2.2	0.22	0.07	0.07	1.04	0.35	0.005	"	1.6	0.8	0.5	0.5
	100	78.0	52.0	54.0	2.7	0.27	0.09	0.09	1.28	0.43	0.006	"	1.9	1.0	0.6	0.6

表-13 キャリオール 100.0 m³ 当り運搬歩掛り表

機 種	運 土 距 離	実 作 業 一、 日 の 土 量	月 平 均 一、 日 の 土 量	100.0 m ³ 当 り														
				材						料				労			力	
				軽 油	モ ビ ール 油	ギ オ ヤ イル	グ リ ー ス	ボ ロ	揮 発 油	ケ ー プ ル	タ イ ヤ ー	削 土 刃	雑 品	操 作 手	整 備 員	助 手	人 次	
D 6 7 0 ト 立 米 ラ ク ス ク レ ー 率 引 い	100	307.0	205.0	18.0	lit 0.9	lit 0.09	kg 0.03	kg 0.03	lit 0.33	m 0.24	本 0.002	組 0.002	材 料 費 の 内 3%	人 0.5	人 0.2	人 0.2	人 0.2	
	150	246.0	164.0	23.0	1.2	0.12	0.04	0.04	0.41	0.30	0.002	0.002	"	0.6	0.3	0.2	0.2	
	200	205.0	137.0	28.0	1.4	0.14	0.05	0.05	0.49	0.37	0.002	0.002	"	0.7	0.4	0.2	0.2	
	250	175.0	117.0	32.0	1.6	0.16	0.05	0.05	0.57	0.43	0.003	0.003	"	0.9	0.4	0.3	0.3	
	300	153.0	102.0	37.0	1.9	0.19	0.06	0.06	0.65	0.49	0.003	0.003	"	1.0	0.5	0.3	0.3	
	350	136.0	91.0	42.0	2.1	0.21	0.07	0.07	0.74	0.55	0.004	0.004	"	1.1	0.6	0.4	0.4	
	400	123.0	82.0	46.0	2.3	0.23	0.08	0.08	0.81	0.61	0.004	0.004	"	1.2	0.6	0.4	0.4	
	450	112.0	75.0	50.0	2.5	0.25	0.08	0.08	0.89	0.67	0.004	0.004	"	1.3	0.7	0.4	0.4	
500	102.0	68.0	55.0	2.8	0.28	0.09	0.09	0.98	0.74	0.005	0.005	"	1.5	0.7	0.5	0.5		
D 9 8 0 ト 立 米 ラ ク ス ク レ ー 率 引 い	100	349.0	233.0	18.0	0.9	0.09	0.03	0.03	0.29	0.21	0.001	0.001	材 料 費 の 内 3%	人 0.4	人 0.2	人 0.1	人 0.1	
	150	285.0	190.0	22.0	1.1	0.11	0.04	0.04	0.35	0.26	0.002	0.002	"	0.5	0.3	0.2	0.2	
	200	240.0	160.0	26.0	1.3	0.13	0.04	0.04	0.42	0.31	0.002	0.002	"	0.6	0.3	0.2	0.2	
	250	208.0	139.0	30.0	1.5	0.15	0.05	0.05	0.48	0.36	0.002	0.002	"	0.7	0.4	0.2	0.2	
	300	183.0	122.0	34.0	1.7	0.17	0.06	0.06	0.55	0.41	0.003	0.003	"	0.8	0.4	0.3	0.3	
	350	164.0	109.0	38.0	1.9	0.19	0.06	0.06	0.61	0.46	0.003	0.003	"	0.9	0.5	0.3	0.3	
	400	148.0	99.0	42.0	2.1	0.21	0.07	0.07	0.68	0.51	0.003	0.003	"	1.0	0.5	0.3	0.3	
	450	135.0	90.0	46.0	2.3	0.23	0.08	0.08	0.74	0.56	0.004	0.004	"	1.1	0.6	0.4	0.4	
500	125.0	83.0	50.0	2.5	0.25	0.08	0.08	0.80	0.60	0.004	0.004	"	1.2	0.6	0.4	0.4		

註： 1. 表-12, 13 は建設者関東地方建設局直轄施工による昭和 25 年度実績を基準として算定したものである。
 2. 欄中の「月平均 1.0日の土量」は1ヶ月間中実作業日数を 20 日とした月間 1.0日の平均値である。
 3. 本表の歩掛りは平坦地上を土運箱に山積運搬する普通土の「自然状態」に於ける 100.0 m³ 当りの歩掛りである。
 4. 土質条件, 気候条件が悪い場合は, 騒動日数及び作業能率が大きく変化するものであるから, この場合は実作業可能日数及び作業能率を充分検討して歩掛り計算を行わねばならぬ。

第4回 国土建設週間について

建設省では例年の通り, 都道府県と共に各官庁, 報道機関の後援, 関係団体の協賛の下に, 7月4日から10日まで「国土建設週間」を実施する。

過去3回の経験にかんがみて, また建設事業そのものの本質からも, この種の行事は, 現場をもつ地方々々の自立的な催しが最も効果的であると考えられるので, 各地方当局の創意に富む企画と, 積極的協力が望まれる。

特に本年は講和第一年に当る記念すべき年であるから特に盛大に行う意向である。

建設省では次のようなものを実施する予定である。

展覧会

第1会場: 災害と建設展 三越本店において
7月8日~13日

第2会場: 建設機械の実物展示 日比谷公園において 7月2日~10日

建設祭 日比谷公会堂において 7月10日午後1時
建設大臣挨拶, 学識経験者講演, 表彰式, アトラクション等

建設関係者慰霊祭 本省5階講堂において 7月10日, 建設関係殉職者遺族代表を招待, 大臣以下本省職員の前慰霊礼拝

建設機械による道路補修工事の実施

水防演習, 建設現場自動車見学 7月5日 都内新制中学校生徒約150名が参加

模範水防演習の実施 埼玉県栗橋において 7月5日, 地元水防団員並びに県下水防団代表が参加